

論文 / 著書情報  
Article / Book Information

題目(和文)	都市 commons の再生と「ふるさと感」の共有に関する研究
Title(English)	
著者(和文)	加藤まさみ
Author(English)	Masami Kato
出典(和文)	学位:博士(学術), 学位授与機関:東京工業大学, 報告番号:甲第10384号, 授与年月日:2016年12月31日, 学位の種別:課程博士, 審査員:桑子 敏雄,坂野 達郎,猪原 健弘,伊藤 亜紗,土肥 真人
Citation(English)	Degree:Doctor (Academic), Conferring organization: Tokyo Institute of Technology, Report number:甲第10384号, Conferred date:2016/12/31, Degree Type:Course doctor, Examiner:,,,,,
学位種別(和文)	博士論文
Category(English)	Doctoral Thesis
種別(和文)	審査の要旨
Type(English)	Exam Summary

(博士課程)

## 論文審査の要旨及び審査員

報告番号	甲第	号	学位申請者氏名		加藤 まさみ	
論文審査 審査員		氏名	職名		氏名	職名
	主査	桑子 敏雄	教授	審査員	土肥 真人	准教授
	審査員	坂野 達郎	教授			
		猪原 健弘	教授			
伊藤 亜紗		准教授				

### 論文審査の要旨 (2000 字程度)

本論文は「都市コモンズの再生と「ふるさと感」の共有に関する研究」と題し、10章からなる。その目的は、「都市に暮らす市民が生態系を含む環境問題を自らの問題と捉え、かつ自らの意思に基づいて問題解決の当事者として活動することは如何にして可能か」という問いに答えることである。この問いに本論文は、都市の市民がコモンズの再生すなわち生態系を含む環境問題の解決に当事者として活動に関わることは、公園、緑地、河川などコモンズ空間の自然再生活動と、「ふるさと感 sense of home place」すなわち「自己の存在と土地との間の親密な感覚」の認識および多様な人びととの共有を統合することによって可能であるという結論を導いている。

序章では、本論文の目的と背景、先行研究、論文の構成と研究の方法を示している。

第1章「東京の都市河川に見るコモンズの衰退と再生」では、都市コモンズの問題を論じるために河川法改正以降日本各地で成果を上げている市民参加の川づくりを本論文の導入部とした。東京の善福寺川での実践を考察し、この都市河川が都市の市民にとって、自然の一部であった河川を社会資本の一部に組み込んできた流域全体の土地利用の問題を認識する場であることを明らかにしている。

第2章「コモンズの衰退と「ふるさと感」の喪失」では、東京の河川の問題が明治初期からの都市の西洋的近代化と拡大に起因しており、結果として生物生成の要である基底善のコモンズ（土壌・水・大気・陽光）までが衰退していることを示した。人工的都市環境は、人びとの自己と土地との間の親密な感覚、すなわち「ふるさと感」を喪失させていること、一方子どもたちは清掃活動や調査にかかわることで劣悪な河川環境に親密感を見出している等の考察を通して、都市における「ふるさと」概念の再検討の必要性を指摘している。

第3章「E. カレンバックの「エコトピア」概念への着目」では、「ふるさと」概念を再検討するために資源循環型社会を小説で示したカレンバックの「ホーム・プレースとしてのエコトピア」概念と「環境のユートピア」として用いられている「エコトピア」の相違を検討して、彼の「エコトピア」概念とユートピア思想、ユートピア的世界観の違いを明らかにしている。

第4章「「ホーム・プレース」としてのカレンバックの「エコトピア」」では、カレンバックの小説執筆の契機となったユートピア的世界観を背景にもつアメリカ近代工業化社会を俯瞰したのち、彼の「エコトピア」概念から持続可能な都市社会を導く4要素を抽出している。すなわち、「有機資源の循環に基づく「安定状態（ステイブル・ステート）」の概念、人びとと土地との間の親密感を表す「センス・オブ・ホーム・プレース、環境容量を規定する「バイオリジョン」の概念、「アーバン・エコロジー」の概念を抽出している。

第5章「都市の危機克服プロセスにおける市民活動とセンス・オブ・ホーム・プレースの関係」では、オレゴン州ポートランド市が1960年代の「都市の危機」を熱心な市民活動と卓越したリーダーシップにより成長管理政策と中心市街地のコモンズ再生を通して克服した経緯と、「都市の危機」を教訓とする土地保全制度と市民参加システム、気候変動への対応を概観している。最後に同市の実践とホーム・プレースとしての「エコトピア」の4要素との類似性を明らかにしている。

第6章「神田川流域の土地利用とコモンズ空間」では、コモンズ空間の保全を困難にしている地方分権の状況を考察するとともに、「文京区立元町公園」の保存運動と「杉並区立蚕糸の森公園」の創生と保全の事例は、市民活動の重層的ネットワークとふるさと感の共有が存在する地域ではコモンズ空間の課題を克服するという点を明らかにしている。

第7章「ふるさと感と市民参加の形態」では、6章までの議論を基に「ふるさと感 sense of home place」の構成要素と土地との関係、オレゴン州とわが国の土地政策の相違を考察したのち、課題に対応しうる地域の「市民参加の形態」と「都市システム」の関係をモデル化している。

第8章「東京におけるコモンズの再生」では、実践的研究を通して都市河川における「多自然川づくり」の手法とふるさと感の共有を導く「ふるさと見分け」の手法の有効性を検討している。最後に「ホーム・プレースとしてのエコトピア」の4要素を応用して都市河川の流域に適したコモンズ再生を展望している。

終章では、結論と今後の課題について述べている。

以上を要するに本論文は、市民の自然再生活動を通して都市の環境問題を整理し、近代的都市政策が「基底善のコモンズ」の劣化を招いているということ、それらの修復には土地利用のあり方の再考を必要とすることを明らかにしている。都市コモンズの再生には「ふるさと感」の共有と「ホーム・プレースとしてのエコトピア」の観点が応用可能であること、人びとのふるさと感の共有と自然再生活動への参加を統合することによって都市市民が当事者として環境保全活動に関わることが可能となることを明らかにした点で学術的貢献が大きい。よって、博士（学術）の学位を与えることが適当である。